

竜の子 奨学生

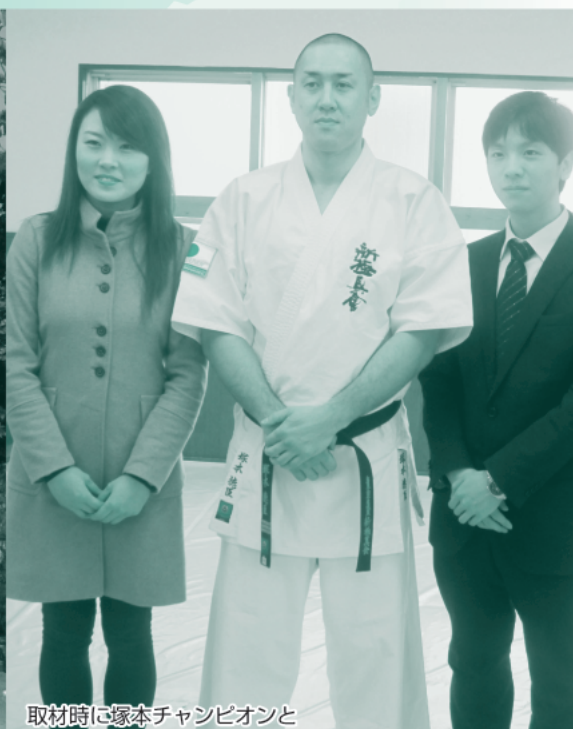
TATSUNOKO NEWSLETTER

第9号
Mar.2012

その夢は、きっと世界を変えていく。



第16回交流会（沖縄にて）



取材時に塚本チャンピオンと

Contents

- P.2 一語一会「万国津梁」
- P.3 第16回交流会レポート（沖縄研修旅行）
- P.6 第10回全世界空手道選手権大会観戦記
- P.7 第10回全世界空手道選手権大会優勝者
塚本選手へのインタビュー
- P.8 竜の子近況報告

- P.12 SPECIAL REPORT I
一伝統を大切にする日本ならではの心、老舗一
- P.13 SPECIAL REPORT II
一外国から見た母国 バングラデシュ一
- P.15 寄付者の紹介／Topics
- P.16 編集後記

公益財団法人
秋元国際奨学財団

「万国津梁」

当財団は、竜の子の皆さんをサポートする目的で、色々なイベントを企画し、実施して来た。昨年は7月に、その一環として私の出身地である沖縄県へ、三日間の研修旅行が実施され、35名の参加があり大いに賑わった。沖縄は歴史的にも、地政学的にも日本国内では、特異な存在であることから竜の子の皆さんには、驚きや感動の連続があったようだ。旅行のあと、皆さんから多くのお礼の書状を頂戴したが、皆さん様に、空と海的美しさと共に、県民のやさしい眼差しや人情あふれる接客対応に感動した旨、又是非再訪したい大変意義深い旅行で感謝しますとの内容で、こちらの方が恐縮する位の、実に礼儀正しい書状の数々であった。

首里城内に「万国津梁」（万国の架け橋）の銘文がある釣鐘がある。独立王国だった頃（14世紀）琉球国王尚泰久が王国運営の大方針として、内外に宣明し、実施した政治理念を明確にする為に鑄造させたものと云われている。その言わんとするところは、国をオープンにし、諸国地域と交易を盛んにし、人、物、文化、芸能などあらゆるものの交流を自由にし、共存共栄をはかると云うものであった。この方針は、王国が続く約500年間踏襲され、その後、政治や統治形態が変わっても、このオープン精神は不変で、沖縄県民の血となり肉となっていると思われる。排除の思念が全くなく、他者を尊い、受け入れ共存する。他方、県外、国外に勇気をもって雄飛し、いつまでも故郷を思いつづけて努力する。これが平均的な沖縄県民像であり、皆さんが接した人々である。僅か三日の滞在。限られた人数との接触であったにもかかわらず、皆さんは直ちに実像を見抜き、感動を覚えたとのこと。皆さんの洞察力と、感性の高さに敬服した次第である。

皆さんは、志を立てて日本に留学され、目下その目的に向かって日々努力を尽されていると思います。哲学者ニーチェは「汝の立つところを深く掘れ、そこに泉あり」と教えており、皆さんも、自らの目指す専門分野においては、深く掘り進んでいると思います。それはそれで正しい道です。他方、日本には、「専門バカ」と云う庶民のシニカルな言葉があります。皆さんは、異郷の日本でそれぞれ目的を持ち、志を立て、両親や関係者らの期待をになって勉強されている筈です。これらの人々は、皆さんに専門分野での成功、知見や学位資格の取得等の目的を達成されること深く望んでいるでしょう。皆さんは最低限、この期待にこたえなければなりません。しかし、皆さんは日本に留学されています。座学や研究室内での実験等で終わってしまっただけではいかにも勿体ない話です。折角、日本に来たのですから、できるだけ多くの学問外の日本人と交流し、自国と違う習俗や考え方を汲み取り、自己の人格形成の肥やしにして、そこから自己啓発や人間力の厚みにつなげて欲しいと思います。間違っても「専門バカ」と云われることのない様、自己啓発を遂げられることを願います。

皆さんは、それぞれ志を実現し、大きく成長して帰国され、それぞれの国、地域でオピニオンリーダーとして活躍されることと思います。その際、日本留学で得た良い絆を大切に、様々なチャンネルを通じて、日本と自国との良好な関係を築くことに力を尽していただければ、当財団の喜びはこれにすぐるものではありません。それが正に「万国津梁」の実践と云うべきものでしょう。この様な場合、沖縄の県民は大声で「チバリヨ!」と叫んで皆さんを心から激励するでしょう。皆さんのご健闘を祈ります。

秋元国際奨学財団 監事 伊礼 勇吉

昭和12年8月25日生

学歴・職歴

昭和36年 京都大学法学部卒
昭和42年 東京弁護士会入会
平成14年度 日本弁護士連合会筆頭副会長
平成14年度 東京弁護士会会長

その他

・平成15年度 日弁連倫理委員会委員長
・日本法律家協会理事・幹事、関東支部長、社会福祉法人河田厚生会理事、他
・大東文化大学法科大学院非常勤講師



「一語一会について」

竜の子奨学生にとって、財団関係者からの励ましの言葉は、大変貴重なものです。そして、竜の子奨学生には、その言葉は一生に一度の出会いであると心得て、そこから多くのことを学んでほしいという願いを込めて、このコーナーを「一語一会」と名付けました。

第16回交流会レポート

2011年7月16日(金)朝から18日(月)にかけて、財団関係者および竜の子奨学生31名が日本最南端の沖縄へ研究旅行に行きました。大自然の絶景や独特な文化を体験し、充実な旅を実現しました。

2011年7月16日(金)、財団関係者および竜の子奨学生31名が羽田空港に集合し、沖縄旅行を行いました。みんな久しぶりに会って、お互いに挨拶しました。8時35分にみんな飛行機に乗って、東京から出発。11時半ごろに、飛行機から沖縄が見えてきました。上空から下を見ると、透明な海、真っ白なビーチ、その自然が創り出す美しさを初めて見て、心の興奮を抑えきれませんでした。

飛行機から降りたら、もうお昼でした。みんなは興奮の心情をまだ静められず、すぐバスに乗って、昼食会場に移動しました。昼はバイキング形式で、好きな料理を選び、みんなしゃべりながら、夢や進路の話で盛り上がりました。

午後1時ごろ、みんな昼食が終わり、これから、旅行の第一目的地のひめゆりの塔に移動することにより、三日間の沖縄研修旅行が始まりました。

ひめゆりの塔は、第二次世界大戦で犠牲したひめゆり学徒隊の慰霊碑とひめゆり平和祈念資料館からなります。館内に展示室が5つの主題に分けられ、それぞれはひめゆりの青春、ひめゆりの戦場、解散命令と死の彷徨、鎮魂と回想であります。そのほか、平和への広場、多目的ホールもあります。

案内者の紹介からはじまり、当時の雰囲気を説明してもらいました。みんなが慰霊碑を礼拝して、その後、平和祈念資料館に入りました。館内を案内してくださった方は戦争体験者のおばあさんでした。その方に、第二次世界大戦沖縄戦の背景や歴史経過を解説してもらって、このような美しい島が戦争に巻き込まれたことを初めて知りました。戦争で犠牲になった学生はほとんど20歳以下の女の子でした。あんな花のような年で戦争に巻き込まれて、国のために戦わざるを得なかったことを知って、心を痛めました。特に生存者の証言を記録したフィルムを見た時、本当に涙が出るほどでした。「私たちは、真相を知らずに、戦場に出て行きました」、「太陽の下で大手を振って歩きたい」… 生徒たちの声を聞くと、戦争の悲惨さと生徒の恐怖感が痛いほど伝わります。

午後2時半ごろにみんな資料館から出て、45分にバスに乗って、第二目的地の首里城に移動し、3時半に到着しました。

首里城は琉球王国時代の国王の住まいの場所です。皆さんは守礼門で降りて、ここで集合し、記念写真を撮りました。その後、みんな周りの景色を見ながら、正殿に向かっていきました。正殿外部から見ると、中国の建築様式を持った

造りで、全体は赤であります。正殿内部は中国と日本両方から影響を受けた装飾に溢れており、様々な漆器や絵画など工芸品が保存されています。首里城は中国や日本、東南アジアなどとの交易から様々な文物がもちあわさって、独自の文化が形成されました。

二日目は、午前中に沖縄美ら水族館に行きました。館内でサンゴ、深海魚、珍しい魚やカニなどを見て、館外で透明な海や真っ白なビーチを見て、沖縄の美しさを体験しました。昼になるとホテルに戻って、ごはんを食べて、その後にビーチバレーを全員で行いました。



ひめゆりの歴史を真剣に聞いている奨学生たち



首里城の前にて

(担当：平成23年度竜の子奨学生 東京海洋大学 呂 思文)

最終日には、沖縄電力の具志川火力発電所を訪れました。現在の沖縄電力は、1954年にアメリカ合衆国に依って設立された琉球電力公社が、1972年の日本復帰を期に特殊法人沖縄電力株式会社となったものです。1982年には、漸く沖縄県の全島に電力が行き渡るようになり、1988年に特殊法人が民営化されました。

現在の日本の電力の現状を考えると、沖縄は少し特殊な地域です。というのも、沖縄には日本で唯一原子力発電所がなく、深い溪谷が無いという自然環境で水力発電所はないからです。そのため、全発電量の9割以上が火力発電に依って賄われています。そして、牧港火力発電所（浦添市）、石川火力発電所（うるま市）、具志川火力発電所（うるま市）、金武火力発電所（国頭郡金武町）という4箇所の火力発電所が管内の電力のおよそ25%の、牧港ガスタービン発電所（浦添市）、石川ガスタービン発電所（うるま市）、宮古ガスタービン発電所（宮古島市）、石垣ガスタービン発電所（石垣市）といった4箇所のガスタービン発電所がおおよそ50%の、その他、14箇所の内燃力発電所が管内の電力のおよそ25%の量を供給しています。そのうち、私たちが訪れたのは、うるま市にある具志川火力発電所です。

今年3月に起きた東日本大地震でその恐ろしさがわかったように、原子力発電所は決して安全なエネルギー源ではありません。そして、現在の我々が便利に生活することによって発生するリスクは、このまま次の世代は引き継がれることになってしまうので、私たちは、次の世代に不義理をしているわけです。原子力への依存度を減らすために私たちにできることは省エネです。エネルギーは需要に応じて供給されるものですので、使う量を減らせば作る量が減るのは当然なことです。次は、原子力の代替のエネルギー源を見つけることです。太陽光、風力、バイオマスなど、自然にあるエネルギー源を有効に使うことで、石炭や石油などによって生じる、環

境汚染、資源枯渇、気候変動などの問題を防ぐことができます。ただし、これらのエネルギー源は、既存のエネルギー減よりコストが高く、現在の技術力では大量の電気を発生することが容易ではないので万能ではありません。それでも、技術革新、コストダウンなどの取り組みを通じて、再生可能エネルギーの普及率は徐々に広がっています。

このような取り組みの一環として、沖縄電力の具志川火力発電所は沖縄県内でほとんど有効利用されず焼却処分されていた建物廃材を発電用燃料として利用するための研究を進めてきました。そして、今回の見学で取り組みの詳細を聞くことができました。開発者の説明によると、具志川火力発電所は平成19年6月～平成20年10月にかけて実証実験を行い、燃料として十分利用できることが確認されたことから、木質バイオマス供給設備の建設を進めて、平成22年3月からは本格運用を開始しました。現在は、具志川火力発電所の1号機と2号機に全体量の約3%に当たる2万トンの木質バイオマスを使っていて、廃棄物のリサイクルと年間3万トンの二酸化炭素削減という一石二鳥の効果を生み出しています。

今回の見学で、環境問題に対応するための具志川火力発電所の積極的な取り組みを学んだ上で、常に電気を使いながらも電気の重要さと発電に関わる様々な問題を気づいてなかった我々にとても良い勉強になりました。台風の影響で天気が悪く、土曜日だったにもかかわらず、やさしくご説明して下さった発電所の皆様にも心より感謝申し上げます。

参考資料

http://www.taiyoko-tokutoku.jp/tokushu_top/tokushu_3/tokushu3-22.html
http://www.okiden.co.jp/shared/pdf/news_release/2009/100325.pdf



沖縄の発電現状に関する説明を聞いています。



発電所の前で記念撮影

(担当：平成22年度竜の子奨学生 京都大学 斐 蘭珠)

2011年7月17日（日）に竜の子奨学生たちは、沖縄美ら海水族館を見学し、その後海辺でビーチバレー大会を開催し、大いに盛り上がりました。こういったイベントを通して、奨学生のみなさんは南国沖縄という普段と違った風土に魅了されつつ、お互いに交流を深めることができました。



～沖縄美ら海水族館の前で眩しさに耐えながらの全員記念撮影～



～台風の影響で天気は少々崩れ気味でしたが、みなさんはお構いなくの奮闘ぶり！～



～ビーチバレーの優勝チーム～



～大変お世話になった伊礼先生を囲んでの夕食会～



～沖縄の伝統楽器に興味津々の奨学生たち～



～沖縄知事公邸にて～

（担当：平成23年度竜の子奨学生 東京外国語大学 魏 登輝）

● 全世界空手道選手権大会観戦をして ●

2011年10月22日（土）から23日（日）まで、第10回全世界空手道選手権大会が東京体育館で開催されました。十数名の竜の子奨学生たちは、この盛大なイベントを通して、空手を間近に体験することができました。

10月23日の朝10時、東京体育館のある千駄ヶ谷で久しぶりに会った奨学生たちはすこし照れながら挨拶をし、自分の近況の話をしていました。ところが、話がその後の空手観戦となると、奨学生のみなさんはだれもがわくわくの気分を抑えきれない様子でした。実は、以前秋元国際奨学財団の交流会で多くの奨学生は全世界空手道連盟真極真会の総本部道場に訪れ、そこで元世界王者の緑健児氏をはじめとする方々から教わった経験があり、それで空手に興味を持つようになった奨学生が多くいます。

10時30分から、長い列を並び終え、会場に入ることができました。そのとき、会場内ではすでに試合が始まっており、多くの空手ファンが選手たちに送った応援のエールで賑わっていました。今回、会場には多くの外国人選手やメディア関係者が来ていて、名実とも全世界空手道選手権大会であると感じました。

全世界空手道選手権大会は1975年から始まって、その後次第に全世界で強い影響力を持つようになってきました。そして、近年は実力のある外国人選手が多く現れ、世界王者を日本人選手とともに争ってきています。今回においても日本はこれまでの王者の座を守りきれのかということが一つの見所です。

試合の中で選手たちによるバット折の披露があり、各国代表の究極の技で会場内は大いに盛り上がり、奨学生たちも思わず立って見るようになってしまいました。そして、試合がどんどん進んでいくにつれ、だんだん白熱化していき、規定時間内に勝負がつかない試合が多くなり、延長戦に入っても勝負がつかなく、再延長戦に突入するケースもあります。さらに、ルーマニア選手と日本人選手の対決で、最後の最後に引き合いの結果となり、体重が軽い側が勝利するというウェイト制まで採用され、ようやく勝負がつきました。こうした激戦で勝ち抜いて、男子決勝戦に進出したのは塚本選手

と村山選手で、女子には将口選手とマルガリータ選手でした。

決勝戦の前に、少年部の演武披露がありました。子供たちのかわいい演武ぶりに観客たちは大きな拍手を送り、緊張していた空気が一時和らぎました。それから、いよいよ決勝戦に入り、会場内はまた緊張感が高まり、奨学生たちも何度も息を止めながら選手たちの戦いぶりに注目していました。最後に塚本選手と将口選手の渾身の健闘によって、日本人選手は空手母国のプライドをかけて、最後の最後まで戦い抜いて男女とも王者の座を守りきりました。その堂々とした戦いぶりと最後まで諦めないという偉大な精神力に全会場が感動し、何度もクライマックスを迎えました。

試合の途中に、メディア関係者による外国人選手へのインタビューがありました。私は中国人選手へのインタビューに同行し、取材の通訳をやりました。二人の中国代表によると、空手は中国の上海や北京にも道場があり、練習する人数は2千人以上となり、普及しつつあります。多くの人達の動機は空手の文化的魅力に惹かれたということです。また、空手は体力だけでなく、人の精神面も鍛えることができるということがその普及の大きな要因であると張選手から伺いました。

今回の観戦を通して、日本の空手の持つグローバルな影響力をはじめて肌で感じることができました。そして、登場する選手たちは勝ちであれ、負けであれ、どんな状況でも正しい礼儀、他の選手への尊敬を忘れていないことから、彼らは空手を単なるゲームや試合でなく、一種の文化として深く自分の中に植えつけているように感じ取れます。空手は日本だけでなく、すでに「世界の空手」になりつつあります。

これからの世界はどんどんグローバル化していきます。その中で、異文化交流、多文化共存というコンセプトをどのように実行していくのかということについて、「世界の空手」は重要な意味を持っていると思います。



中国の張代表（左）と劉代表（右）



各国代表選手に対する表彰式



奨学生たちと優勝選手たちとの記念撮影

（担当：平成23年度竜の子奨学生 東京外国語大学 魏 登輝）

● 第10回全世界空手道選手権大会 優勝 塚本選手へのインタビュー ●

2012年1月24日（火）、新極真会世田谷杉並支部の塚本道場にて世界チャンピオンであり支部長の塚本徳臣選手取材しました。塚本道場は子供から大人まで約170名在席しており現在7年目を迎えています。そこへ奨学生を代表して塚本選手と直接面会させていただき、今の心境など貴重なお話を伺うことができました。

質問：全世界空手道選手権大会でのご優勝、おめでとうございます。空手のチャンピオンには素朴な質問ですが、塚本選手は空手に対してどのように理解されているのでしょうか

ありがとうございます。空手を通して自分の心を明らかに、そして強くすることができます。一言でいえば失礼なんですけど、空手は僕のすべてを支えてくれたモノです。



世田谷区の塚本道場



塚本道場内での取材の様子

質問：空手をはじめたきっかけは何でしょうか
小さいころは体が弱くて、本当は画家になりたかったんです。ですが学校などでいじめにあわないように父親の勧めもあり、空手を練習し始めたんです（笑）。その中で本当の強さとは何かを考えるようになったことが、本格的な空手をはじめたきっかけでした。

質問：練習が辛いとき、苦しい時に心の一番の支えは何でしょうか

僕は長崎の出身ですけど、東京に出てきた時に周りの仲間は「お前なら、東京に行っても絶対成功する」と信じてくれた。そういった仲間が一番の支えでした。というのは、自分が負けるのはいいのですが、地元の道場や先輩・仲間が否定されるようなことだけはあってはいけないと思ったからです。

質問：空手が強くなる方法は何でしょうか

強くなるためには古くから技を学ぶよりも、本当は自分の心のほうが強くなる方法を知っていると思う。それに気づくためには、心がキレイであって、人のため皆のために勝ちたいと思う人であって、ただ自分だけが強くなりたいと思っている人は気づかないと思います。

質問：空手は現在、諸外国にも広がりつつありますが、それについてどう思いますか

空手など武道全部を通して、力だけが強くなるのではなく、精神面も鍛えることが非常に大事だと思いますね。そして、空手の大会や稽古を通して世界の人たちと、身体だけでなく精神面も切磋琢磨して、全てが繋がって一つであることを一人でも多くの方がわかれば、紛争とかもなくなるだろうと思います。

質問：先日の第10回全世界空手道選手権大会でも中国の選手2名が参加しておりました。残念ながら1回戦で敗退しましたが、いかがでしたでしょうか

大会の結果が最強とかベストとか信じてはいないです。必ず勝ったり負けたりするので勝ち続けるのは難しいと思います。一生懸命頑張ってそのときに心の状態がいい選手が勝っていくと思うのです。残念ながら彼らは1回戦で負けましたが、彼らは明るく・礼儀正しく・謙虚でとても素晴らしいと感じました。

質問：最後に私たち竜の子奨学生にメッセージをお願いします

みなさんは本当に優秀な方で、将来社会に大きな役割を果たすようになると思いますけど、それでもやはり常に誰かのために、人のために頑張っていくという姿勢でいてほしいです。それができれば、自分自身ももっと強くなれますからね。皆さん、ぜひそういう他人思いでがんばってください。

取材を終えて・・・

今回塚本選手へのインタビューを通して、空手に対するイメージが大きく変わりました。お話の中によく出ていた「ただ自分がどれほど強くなるのでなく、常に人のために強くなりたい」という思いこそが、塚本選手が「最年少で世界チャンピオンになり最年長でも世界チャンピオン」を成し遂げた力の源ではないかと思いました。これから社会人になっていくわたしたち奨学生にとって、この塚本選手の思いはきっと大きな励みになってくると思います。

ここで塚本選手に改めて御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

竜の子近況報告



文化祭の時、ジャガイモモチヂミを作り販売しました。

イ ダイヨン
李 大英 (韓国・ソウル市)
 北海道大学 水産学部3年

「北海道大学水産学部の文化祭」

北大の文化祭が11月5、6日にありました。毎年大学祭の時は留学生たちが自分の国の食べ物を販売することになっており、韓国の店ではジャガイモモチヂミでした。

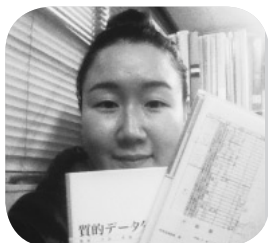
現在3年生でそろそろ研究室を決める時期になりまして、4年生から入る研究室を色々見回っています。今まで、一番興味深く思っていたところはタンパク質であったため、ほぼ行きたい研究室は決定しています。特に海洋生物や藻類からのタンパク質を研究すると思います。タンパク質の機能からはじめ立体構造の同定、遺伝情報から生命工学のところまで、幅広い分野でまだまだ勉強が足りないと思いながら一所懸命頑張っています。今でも盛んに研究されているこの分野で、将来に工業や人間に役に立つ貢献ができればとわくわくしています。



チェ ミン (韓国・富川市)
 東京外国語大学 外国語学部4年

「卒業に向かって頑張っています」

2012年3月で来日6年目になります。気持ちとしては今年大学に入ったように感じています、いつの間に卒業を目の前にしています。なんだか切ない気持ちです。今(2011年11月)は、無事卒業できるように卒業論文に力を入れているところです。締め切りまで残り50日を切ったところなので、卒業論文が完成できるかどうか心配しています。多分大丈夫でしょう(笑)。今度の交流会は3月なので、そのときにはもう卒業論文は完成し、卒業式のことでわくわくしていると思います。卒業を目の前にして、「今まで何でもっと頑張らなかつたんだろう」とか、もうちょっと良い思い出を作れば良かったのに等、やはり、いろんなことを考えてしまいますが、でも良い経験になったとつくづく思っています。



授業の参考文献と学類の名簿です。ここはD1の学習室です
 キム ウンハ
金 恩河 (韓国・蔚山市)
 筑波大学 人間総合科学研究科
 障害科学専攻 博士後期課程1年

「学類の授業をやっています」

2学期からは「障害科学研究法実習」という学類の授業が始まりました。この授業は院生が授業をしてレポートを採点します。この活動は院生にとっても授業の単位になります。最初の授業では「日本語でつまづいたらどうしよう、質問に答えられなかったらどうしよう」と心配でしたが、2回目からは楽しくやっています。いつも教えてもらう側でしたが、今回学類2年生を教えてみて勉強になりました。やっぱりレポートはメ切が大事ですね(笑)。



北大のキャンパスで
 オウ シュンコウ
王 俊紅 (中国・黒竜江省)
 北海道大学大学院教育学院 教育学研究科
 教育学専攻 博士後期課程3年

「論文、頑張っています」

北海道は11月に初雪が降りました。これから銀色の世界になるでしょう。秋元国際奨学財団のおかげで、10月23日(日)に、東京体育館で行われた第10回全世界空手道選手権大会を観戦してきました。皆さんと再会でできて嬉しかったです。空手選手たちの強い精神にとっても感動しました。世界中の皆が夢を実現するために必死に頑張っているのを見て、それを励みにし、私は論文を頑張りたいです。この間、中国の東北地方で論文調査を行い、天津で開催された世界日本語教育大会で学会発表をしました。そこで得られたアドバイスおよび成果を博士論文に取り込んで、すこしずつ書き進めたいと思っています。



第70回日本癌学会（名古屋）に行ってきました

ソン ビンカ
孫 敏華（中国・天津市）

東京大学医学系研究科 大学院4年

「学位に一生懸命です」

私が日本に来てもう5年という時間が経ちました。振り返って見ると、ドラマみたいに涙も喜びも混ざって、数えきれない困難を乗り越えて、卒業を迎えるようになったと思います。今年からは、実験データを集めるために、研究室で泊まる時が多かったです。周りの人に本当に心配をかけました。でも、このように命を懸けて実験をやったら絶対に研究結果が出て来るので、どんなに疲れても疲れた感じがしないです。

それで、11月に学位論文を大学に提出しました。これでちょっと安心しましたが、未だ、卒業論文の正式な製本のため、実験も残っています。さらに学位の審査が凄く厳しいので、これから何ヶ月間も一生懸命頑張らないとできないと思います。私が秋元国際奨学財団に3年間在籍して、安心して好きな研究に専念することができました。研究成果を出す事ができたのも、秋元国際奨学財団のお陰だと思っています。本当に感謝の気持ちで一杯です。



研究室で作業している私

リン キリュウ
林 熙龍（中国・福清市）

電気通信大学
電気通信学部情報工学科4年

「卒業研究と国家プロジェクトを頑張っています！」

10月から後期の研究室の生活が始まりました。3月に卒業するので卒業論文を書くために、毎日研究を頑張っています。それとともに、研究室の関係で日本の国家プロジェクトに参加しています。皆さんも聞いたことがあると思いますが、2011年11月に発表された世界のスーパーコンピュータ性能ランキングで日本の「京」コンピュータが前回に引き続き1位を獲得しました。私は「京」コンピュータの「ポストペタ時代を超並列固有値ソルバー開発」という国家プロジェクトの研究補助員として雇用されています。分からないことは山ほどありますが、指導教員が親切に助けてくれたおかげで毎日少しずつ進んでいます。



金沢文庫称名寺にて

マ ヨウ
馬 耀（中国・大連市）

筑波大学 人文社会科学部研究科
五年一貫性博士課程5年次

「博士論文を出しました」

12月中旬に、長期間にわたって準備してきた博士論文は、ようやく提出することができました。これで長年の学生生活もいよいよ幕を閉じようとしています。

「大江匡房の神仙文芸研究—神仙伝と願文集を中心に—」というタイトルの博論は、大江匡房の『本朝神仙伝』と『江都督納言願文集』という二つの作品をめぐって、神仙との関連で論じたものとなっています。三部八章の構成をとっておりますが、そのうちの五章分は既発表のもので、残りの三章分は今回書き下ろしたものです。全国学会誌に掲載されている第二部の第一章「神仙境を描く文芸としての「金峯山詣」願文」は、内容が優れていると認められて、10月に第11回筑波大学日本語日本文学会奨励賞を受賞いたしました。11月初旬に、中国の北京大学で開かれた国際フォーラムにおいて、第三部の一章「平安朝前中期の願文における神仙表現」について発表を行ってきましたが、これも好評を得て、みのりのあるものとなりました。

これらの業績は、すべて財団のご支援があってこそその成果だと深く認識しております。長年のご支援に心より感謝いたしております。残り短い学生生活を、今まで通りに、充実した日々にしていきたいと思っています。



リ ケイホウ
李 慧芳（中国・遼寧省）

東京工業大学 総合理工学研究科
化学環境学専攻 博士後期課程3年

「研究室旅行に行ってきました」

2011年10月16、17日に研究室旅行に行ってきました。今回は貸し切りバスで埼玉の秩父と川越の観光をしました。写真は長瀬でラフティングを行う時にとったものです。人生初のラフティングなのでやる気満々にも見えますけど、実はドキドキしていました。素敵なインストラクターさんのおかげで、最高の時間を過ごしました。今は卒業に向けて、精一杯頑張っています。



奥多摩湖にて

オウ エツライ

王 悦来 (中国・河北省)

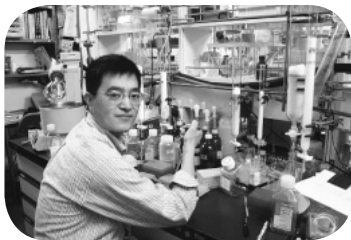
東京工業大学大学院 修士課程1年
メカノマイクロ工学専攻

「就職活動の準備をしています」

2013年4月に入社する予定の就職活動が昨年12月から始まりました。私も2013年修了予定の一人として希望する会社に入社し、一人前の社会人になるために就職活動の準備をしています。

私は機械制御に関する研究を行っているので、自動車業界の研究開発職を第一志望にしています。目標を達成するために、まず自己分析をしました。自分を徹底的に見つめ直し、自分の強みと弱みを客観的に把握しました。次に、職種研究と業界研究を行いました。就職情報サイトを調査したり、先輩に聞くなどして情報を収集しています。

新卒採用は人生一度しかないチャンスなので、自分が持っている強みをアピールし、希望する会社に評価されるように万全な準備を整えて、就職活動に臨みたいと思っています。



研究室で試験をやっています

ヨウ シゴウ

楊 志剛 (中国・河北省)

日本大学博士後期課程3年
薬学研究科・薬学専攻

「学位論文において頑張っています」

今、私は学位論文の発表と博士論文の提出に向けて頑張っております。

論文のテーマは「脂肪細胞機能を調節する生薬に関する研究」であり、桑根皮、沙棘葉及び決明子の化学成分の分離と構造決定、また単離した成分について脂肪細胞を用いて中性脂肪の蓄積を抑制する作用、さらに肥大化した脂肪細胞の慢性炎症状態を改善する作用などについて書いています。秋元理事長や寄付者の皆様のおかげで3月に学位を取って卒業する見込みです。この場を借りて皆様に心から感謝いたします。これから、社会に貢献できるように頑張りたいと思います。今後とも宜しくお願い致します。



パク セヒ

朴 世熙 (韓国・ソウル市)

立命館大学
経営学部 経営学科4年

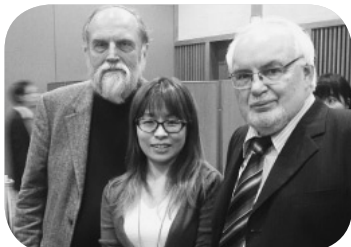
「濟州島で女優になってみました！」

2011年9月に、「世界7代自然景観」として選ばれた濟州島に、4泊5日間行ってきました。濟州島は、日本の沖縄のようにきれいな海や自然が誇りで、黒豚肉も有名です。今回は初めての濟州島での旅行であったため、自然と美味しい食べ物を満喫してきました。

この写真は、濟州島にある一番素敵な「SHILLAホテル」でレッド・カーペットを歩んだ瞬間です！

就職活動によって溜まったストレスを解消し、失った自信を得るため、堂々と「今日は女優だ！」と考えながらレッド・カーペットを歩んでみました。

他には、黒豚肉で作った酢豚やジャージャー麺やアワビなど美味しい食べ物を食べたり、野外で水泳や温泉を楽しみながら元気になりました。現在は卒業論文に力を入れています。



With Prof. Mueller (University of Vienna) and Prof. Hanusch (University of Augsburg)

周 思思

明治大学 商学研究科商学専攻
博士後期課程2年

「近況報告」

「日本経済政策大会国際会議」に参加するために、神戸に行ってきました～関西学院大学は緑豊かでレトロな学校でした。大会のテーマは「Growth」であり、私は設備投資ファクターモデルの検証について発表しました。最初の学会発表なのに全然緊張せずに質疑応答まで一人でやり遂げられたことに自分でも驚いたと同時に、達成感もありました。一方で、沢山のご指摘も受けて、研究にメリハリをつけられて、より一層研究の意欲が湧いてきました。そして、国際学会であったので、多様な国の人と交流する機会となりました。

博士課程に進み、より専門的な勉強をするようになるにつれ、視野も時々狭くなってきたような気がするのが今の悩みだからこそ、毎回秋元国際奨学財団の交流会でみんなからいろんな分野の話を聞けることをとても楽しみにしています。



学会での口頭発表

チョウ グ
張 愚 (中国・大原市)
九州大学
人文科学府言語・文学専攻
博士後期課程2年

「学会発表報告」

昨年の9月に、西日本国語国文学会で「感情語彙の史的研究」というテーマの研究論文を発表しました。続いて10月下旬に、日本語学会2011年度秋季大会で、感情語彙にあたる「むざん」という一語を取り上げ、各時代の文献資料に見られるその語義変化と統語的位置の変化の相関関係について発表し、好評を得ることができました。感情を表す語彙は、人間の内面を表出するものであるゆえに、日常生活の中で多用されています。この「人間の内面」を表す語彙には、中国の典籍に見られる漢語でありながらも、日本語の中で独自に意味が変化しつつ、定着してきたものがあります。そこで、私は、本邦文献における漢語の受容という観点から、感情語彙の歴史的変遷についての考察を試みようと、12月上旬に行われる全国大学国語国文学会で、それについて発表することになりました。

お陰様で私自身今までの最高記録で、昨年4月から学会及び研究会で5回も発表することができました。これは、皆様のご援助なしには成し得なかったことでございます。これからは、皆様のご好意並びにご援助に報いるためにも、自分の研究成果を日本語教育分野に貢献できるように頑張っていく所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。



ト メイウ
杜 銘雨 (中国・山東省)
立命館APU
アジア太平洋マネジメント学部4年

「夏休みにインターンシップに行ってきました」

昨年の8月下旬に日立プラントテクノロジーと九州経済産業局で職場体験（インターンシップ）をやりました。それぞれ5日間短い時間でしたが、日本で就職する際に貴重な経験になりました。私は日立プラントテクノロジーの人材開発グループに配属され、採用結果の分析を手伝ったり、社員の人にインタビューを行ったりしました。以前は人事部の仕事についてあまり知識がなかったが、インターンシップを経て、特に国際人事の仕事に興味が湧いてきました。そしてゆっくり休むことがなく、福岡に移動し、九州経済産業局でのインターンシップが始まりました。私は環境対策課で九州の環境・リサイクル産業の振興について勉強や、サブクラスター研究会に参加したり、また局外の協力団体の担当者との意見交換も行いました。民間企業と異なる視点から、中小企業の海外進出に当たって産学官連携の重要性を実感することができました。



ネパールのフェスティバルで

MAHARJAN SUNIL
(ネパール・KATHMANDU)
東京電機大学
情報環境学部 情報環境学科2年生

「充実の毎日を送っています」

私は、大事な中間テストの期間に38℃をこえる熱を出しましたが、なんとか受けることがき無事終わりました。来年から研究室に入り自分が想像していた物をプログラムで組み立てたいと考えているので、自分の希望通りの研究室に入れるように、プログラミング言語を一生懸命学んでいます。あと、私の大学には毎年色々な国から短期留学生が来ていて、今回はインドネシアから4人来ました。去年に続き、短期留学生の生活や勉強、日本語等を教えるピア（peer advisor）をします。留学生の先輩として、短い期間で楽しんでもらい、お互い日本での生活に慣れるように頑張ってます。学校の事以外では、お祭りの多いネパールの中で最大の『ダサイン』というお祭りがあり、久しぶりに沢山のネパールの友達に会って御祝いする事ができました。おかげさまで毎日が充実しています。

SPECIAL REPORT I

● 伝統を大切にする日本ならではの心、老舗 ●

私が日本に留学したのは2007年です。留学する前にも数回日本を訪れました。しかし、日本で暮らし始めると、様々なところに今まで私が持っていた日本に対する印象とは違う側面があることに気づきました。母国韓国は、日本と最も近いところにある国ですが、歴史的な問題に対する立場の違いもあり、日本に対する評価や認識は決して良いものとは言えません。しかも、1965年の日韓国交正常化後も、日本の大衆文化の輸入は韓国政府によってずっと閉ざされていました。こうした状況から日本の大衆文化が開放されるようになったのは1998年で、まだ10年余り前のことです。それ以前は、一般人が日本の大衆文化に接することは出来ず、日本に対しては否定的なイメージが多かったように思います。また1998年に日本の大衆文化の輸入が許可されてからも、その内容が通俗的なものや暴力的なものが多く、韓国民に悪影響を与える否定的な側面が強調され、それは繰り返し「日本文化」としてイメージ化されるようになっていました。そのため、日本に留学する前の私にとっては、ある意味で「日本文化」というのは、メディアによって少し歪められていた日本の現代大衆文化だけだったかもしれません。しかし、留学と同時に、日本にはこうした大衆文化だけではなく、祭、俳句など伝統的な要素がたくさん存在していることに気がつきました。その中で最も驚いたのは、日本全国に代々続いた長い歴史を持つ店が数多くあるということでした。

2007年語学コースに通っていた早稲田大学の近くに、1919（大正8）年に創業した「金城庵」という蕎麦屋があり、「やはり、歴史のある店は美味しいんだなあ」と思いながら毎日のように昼食を食べに行きました。しかし、留学生活に少しずつ慣れて、東京の別の店に行くようになりました。そして、大正どころか明治期に創業した天麩羅屋やそれ以前に創業した店が沢山あることに気がつきました。留学当初は友達も少なく寂しかったので、このような歴史のある店を訪ね、食事をするということが私の小さな楽しみでした。でも、ふと考えてみたら、こうした現状が日本文化の特徴だと考えるようになりました。母国ではこのように歴史ある店を目にしたことがあまりありません。むしろ、最近韓国では、カフェなどのレストランだのチェーン店が流行っており、特色のないまったく同じ店がソウルのあっちこっちに散在しています。また新しいチェーン店が流行り始めると、以前流行していた店はその姿を消してしまい、新しい店でいっぱいになります。そのため、日本には長く続けられてきた店が多いというのが不

思議に思われました。このようなことを考えていた時、たまたま朝のテレビ番組で、創業から480年になる和菓子屋「とらや」の社長黒川氏のインタビューを見ました。そして、長年、代々と続けて経営してきた店を「老舗」と呼ぶということが分かりました。

これを機に、私は「老舗」を研究テーマとしようとしていた時期もありました。そして老舗について色々調べてみた結果、確かに日本には老舗が多いことが分かりました。ある調査によると、日本全国に200年以上続いた家族経営店は3100社あり、その数は世界第一であると云われています。「老舗」という言葉は当て字であり、その語源は、「仕似」、「為似」とであるという。先代の技を「まねる」ことで後代に「続ける」という意味でしょう。しかし、下記の「とらや」の社長黒川氏の話によると、老舗はただまねることだけでは成り立たないと思います。

別に伝統のあるところが革新というか新しいことをやっちゃいけないということではない。もちろん、伝統の良さをふまえて、じゃあ今の時代にどういう形で表現していくか考えなければならない。過去にも素晴らしいものがある。それをどう今の時代に合わせるかが大切でしょうね。

私は、黒川氏のこの話を聞き、老舗を存続させるには、伝統の技をまねて続けるということだけではなく、それを今の時代にどのように生かせるかを絶え間なく考える努力が必要であると感じました。でも、私は、それだけではなく、店側の努力に応じて、長い間、愛してくれた客がいるというのも老舗存続の大事な理由ではないだろうかと考えます。店も客もお互いに分かち合い、信頼を築き、昔ながらのことを大切に守っていくこと、これこそが老舗を成り立たせた力であり、老舗の誕生を世界一にさせたのは日本ならではの精神があるからではないだろうかと思います。

私は昨年の夏休みに伊豆の下田に行きました。海辺に小奇麗な洋食屋があり、観光地だから値段が高いだろうと気にしながら入りました。空いている時間帯でしたので、店には私たち一行しかいなく、とても丁寧なサービスをしていただき、店の主人と少し話ができました。その店は彼女のお父様が創業し、今年で42年になるということでした。自分が二代目だという女性オーナーは、食事の後、店を閉めて買物に行くということで、私たちをホテルまで車で送っていただきました。

小高い丘にある私たちのホテルまでは険しい坂道があり、夏に登るのは相当の体力が必要です。そのことを知っている女性オーナーの客に対するこのような心遣いには私は再び感動しました。このような思いやりがあるからこそ長い間、皆に愛されてきたのではないかと思います。この店も3代、4代目まで続き、何十年後には老舗の隊列に参加できればと思います。がら文を終えます。

(担当：平成21年度竜の子奨学生 一橋大学 金 智媛)

BSI「経済羅針盤 オプタイムミーティング 虎屋黒川光博社長」

放送日：2007年11月11日（日）午後6:10～6:40（30分）

BSI「COOL JAPAN 留学生スペシャル」

放送日：2007年12月15日（土）午前0:10～1:50（100分）



早稲田大学の近くにある蕎麦屋 金城庵

SPECIAL REPORT II

● 外国から見た母国 バングラデシュ ●

文化と空気が似ていると言われています。私たちは空気の中に涼んでいてもたまにしか空気を感じていません。文化も同じだそうです。異文化と関わってはじめて自分の文化が分かるという明言になるほどと思っています。母国バングラデシュの高校を卒業して2004年来日した私にとって日本ははじめての外国の旅でした。母国にいたとき言葉は日常生活の最も重要な要素であることをあまり気づきませんでした。「おはようございます」さえ知らない私は日常生活の各段階でコミュニケーションの苦しさや母国語の大切さも感じました。日本語学校へ通い、日本語が少し分かるようになりましたが、やはりうまくコミュニケーションをとるために異文化の理解と自分の文化を相手に分かりやすく伝える必要があると思いました。それは日本と母国は文化や習慣で相違点が多いからです。

現在のバングラデシュはベンガル地方の東側にあります。初期の文明は仏教およびヒンドゥー教の影響を受けていました。北部バングラデシュに残る遺構からこうした影響を推測することができます。13世紀にイスラム教化が始まり、16世紀にはムガル帝国の元で、商工業の中心地へと発展しました。この頃、ベンガル経済の成長に伴って密林の多かった東ベンガルに開発の手が入り、イスラム教徒を中心に開発が進められていました。これにより東ベンガルではイスラム教徒が多数派となっていました。15世紀末にはヨーロッパの貿易商人が訪れるようになり、18世紀末にイギリスの東インド会社により植民地化された。東インド会社は支配をインド全域に拡大していき、その中心地域となったベンガルの繁栄は

続きました。英領インドは1947年に独立を達成したものの、宗教上の問題から、ヒンドゥー教地域はインド、イスラム教地域はインドをはさんで東西に分かれたパキスタンとして分離独立することになり、東ベンガルはパキスタンへの参加を決めました。両パキスタンが成立すると、現在のバングラデシュ地域は東パキスタンとなりました。しかし両地域間は人口にはさほど差がなかったものの、経済や文化などが大きく異なっており、さらにインドによって1000km以上も隔てられた国土となっていました。この差異はあちこちで摩擦を起し、バングラデシュ独立戦争を経て1971年にバングラデシュの独立が確定しました。バングラデシュの面積は日本の4割で人口が約1億4,231.9万人です。そして、イスラム教徒89.7%、ヒンズー教徒9.2%、仏教徒0.7%、キリスト教徒0.3%です。

「魚にお米をプラスすれば、ベンガル料理のできあがり」しばしばこんな風に表現されるのは、バングラデシュのそんな地理背景のためです。日本の食文化と似ていますね。インドと同様、カレーがよく食べられています。バングラデシュでは魚カレーとライスが非常にポピュラーです。もちろん他にも食材は豊富で、肉、卵、野菜、豆（ダル）などさまざまなカレーもあります。ほかには、チャパ



魚カレー

ティと呼ばれる薄焼きパンや、ケバブ、コフタなど、インドと共通した料理も少なくありません。ちなみにベンガル料理とは、バングラデシュのほか、コルカタ（カルカッタ）を中心にしたインドの西ベンガル州の料理を含めています。ただし、バングラデシュはヒンドゥー教徒の多いインドに対して、かつて「東パキスタン」と呼ばれていたほどで、イスラム教徒の割合が多い国です。そのため、食文化もインドとは多少、違ってきます。たとえば豚肉がご法度であり、イスラム教の教義にのっとりて食肉加工されたハラルフードが発達しています。（ハラルフードとは、宗教上で許可されている食品です。）また、アルコール類はイスラム教では原則的に禁止されているので、牛乳入りの甘い紅茶「チャイ」や、新鮮なライムのソーダ、ココナッツ水がよく飲まれています。それに、バングラデシュの人々は甘いものが大好き。クリームやナッツ、サフランやシナモンで味をつけたお菓子がたくさんあります。ポピュラーなのは、「キール」と呼ばれる甘いライスプディングです。バングラデシュでは、インドと同じようにしばしば右手の指を使って食事をします（ただし、都会に住む中流階級の人々はスプーンやフォークを使うことも）。



キール

ベンガル暦の元旦「ポヘラ・ボイシャク」と呼ばれ、ポヘラは1日、ボイシャクは年の初めの月という意味で、つまり西暦でいうところの1月1日にあたるわけです。去年、迎えた年はベンガル暦1418年。ここバングラデシュでは、今でもこの“旧正月”を新年とする習慣が浸透していて、1月1日を何事もなくスルーした人たちも、この日は家族と過ごしたり友達と出かけたりして、しっかりお祭り気分になっています。日本で元日に御節料理を食べるように、こちらでも伝統的な元日料理があります。例えば、前日夜から炊きあがったご飯にお水をかけておき、翌朝すっきり水気を含んでふくらんだご飯（パンタライス）や、バングラデシュで有名な川魚イリッシュ・マースをフライにしたものなどです。このイリッシュ・マースは古くからバングラデシュで食されてきた国民的な魚ですが、最近は海外への輸出が盛んになり市場価格は

かなり上がっています。そして、ポヘラ・ボイシャク前になるとさらに価格高騰です。この日、ダッカ大学近くのロムナ公園では毎年大きなイベントが催され、ステージでは歌やダンスなどのパフォーマンスが続き、大きな公園は家族連れや学生たちで賑わいます。

バングラデシュにいたとき、食べ物のことで困ったこと（ハラルかどうか）はまったくなかったが、日本に来て以来、食事が一番苦労したと思います。食事会で相手/お客（留学生や日本人）にどうして豚肉を食べないとかどうしてお酒を飲まないなどについて何回も説明したことがあります。最終的には多くの日本の方に私たちの文化や習慣を理解していただきました。そして、年末年始の時期になると前述のバングラデシュのポヘラボイシャクのことを思い出して懐かしくなります。日本でもポヘラボイシャクを行います。バングラデシュのような祭り感を感じません。バングラデシュの当たり前のこと（食材や祭り）は日本で珍しいですが、少しでもチャンスがあるとき私たちは十分楽しめるように努力しています。その結果、母国の文化や習慣を保てることができたと思います。

長い間日本に留学のおかげで日本の文化をもちろん学んだし、自分の文化も改めて勉強したと思います。お互いの文化の理解を高めることで互いを尊重する気持ちも強くなり、国と国の距離感が近くなるには違いないでしょう。



ポヘラボイシャクの食べ物（パンタライス）

（担当：平成23年度竜の子奨学生 電気通信大学 イスラム モハンマド ザヒドル）

Topics

税額控除団体として認定されました

平成23年12月20日、内閣総理大臣より税額控除団体としての認定を受けることができ、当財団への個人の皆様方からの寄附金に対し、税制上の優遇措置を選択することができることとなりました。

①所得控除

$$(\text{寄附金合計※1} - 2,000\text{円}) = \text{所得控除額}$$

※1 所得控除の対象になる寄附金は、年間所得金額の40%までです。

②税額控除

(その年に支出した寄附金の合計額 - 2,000円) の40%相当額が、寄附者のその年の所得税額から控除できます。

$$(\text{寄附金合計※1} - 2,000\text{円}) \times 40\% = \text{寄附金控除額※2}$$

※1 税額控除の対象になる寄附金は、年間所得金額の40%までです。

※2 寄附金の税額控除額は、年間所得税額の25%までです。

申告の際には、ご自身にとって有利な方を選択することができます。

寄付者の紹介

財団は、様々な立場の方々から、ご支援をいただいておりますが、特に寄付者の皆様からのご支援は、財団にとって心強い力となっています。前号に引き続き、普段なかなか交流の機会が少ない寄付者の皆様を、竜の子奨学生に知ってもらうための企画です。今号では、阿部亮様に、お話を伺いました。



あべ りょう
阿部 亮 様

- ・司法書士法人新宿事務所
代表司法書士
- ・ニッポン放送ラジオ番組
「阿部亮のNGO世界一周!」
(毎週木曜19時40分)
メインパーソナリティ

質問 秋元国際奨学金財団に寄付をするきっかけは何ですか

私が代表を務める司法書士法人新宿事務所では、設立当初から、子供の教育に関するボランティア活動に力を入れており、その1つとして「世界に学校を建てようプロジェクト」を継続して行っています。現在までにカンボジア、ネパール、ブルキナファソに小学校を建設しております。

財団の理事である、椎塚さんとは5年来の友人で、この財団の奨学金のお話を知りました。

秋元国際奨学金財団様のご活動と、当事務所のボランティア活動のテーマである子供の教育とは相通じることも多いと考え、寄付をさせて頂くことを決めました。

質問 竜の子奨学生に今後どのようなことを期待したいですか

アジアの多くの国の人々から見ると、日本はとても豊かな国に見えるかもしれません。

しかし、この国で生まれた私たちは、その豊かさを外側から客観的に感じ取ることができません。日本の多くの学生たちは経済的理由で大学進学を妨げられることもほとんどないので、学生たちが学べることのありがたみを感じる機会が少ないと思います。

日本という国の内側にいるからこそ、日本の豊かさや学べることのありがたみを感じる事ができない私たちに、留学生の皆さんの目に映る客観的な日本の姿を教えてくださいと思っています。

質問 最後に、竜の子奨学生へのメッセージを一言

必ずやチャンスをものにして、世界に羽ばたく人材になってください。

ご寄付いただいた皆さまへ

竜の子奨学生を代表してご寄付いただいた皆様に心から感謝のお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。皆様の暖かいご支援で、奨学生たちは各分野での勉強や研究に専念することができました。また、皆様のおかげで奨学生たちは日本の方々だけでなく、他の国の方々とも交流を深めることができ、異国にいながらも精神的に大きな支えをいただきました。これからはこの「感謝」の気持ちを忘れずに自分の夢に向かって羽ばたいていきます。いつか自分の努力を通して、皆様からいただいた「恩」を社会にお返ししたいと望んでおります。私たちの成長をどうか見守り、ご期待くださいますようお願いいたします。

(平成23年度竜の子奨学生 東京外国語大学4年 魏 登輝)

編集後記

委員長 東京外国語大学 魏 登輝

会報誌竜の子奨学生第9号の編集が無事に終わることは、わたしにとって実にうれしいことです。編集員として選ばれた当時は財団のために力を貢献できる機会だと快く思ったが、編集経験ゼロなのに編集委員長に指名されたので、大いなる不安を抱えていました。しかし、3回にわたる編集打ち合わせやインタビューの取材を行う際、周りの方々から積極的に手伝ってくださったおかげで、編集作業が順調に進んでまいりました。このような経験を心の奥にとどめ、4月からの社会人デビューに向かって頑張っていきたいと思います。編集に携わった皆さん、本当にありがとうございました。

副委員長 一橋大学大学院 金 智媛

実は2年前にも編集委員のことを依頼されたことがありました。その時は「素人の私が編集の仕事？」という疑問や、修士論文による負担感で一度断りました。でも今回編集委員になって感じたのは、このような経験が自分自身の「勉強」にもつながるということです。「勉強」というのは「研究」のみならず色々な意味が含まれており、それは人によって異なるでしょう。私にとっては「楽しい場」、「思いやり」の心について考えてみるきっかけになりました。最後に、いつも「ウルサイ」私の話を真面目に聞いてくれた編集委員の皆さんに心より感謝します。

委員 電気通信大学大学院 イスラム モハンマド ザヒドル

私は「編集委員として参加できますか」と依頼されたとき、まず疑問に思ったのは修士論文提出の大変な忙しい時期に本当に参加できるかということです。そして、まだまだ日本語能力不十分の私が役に立つのかです(実は今でも疑問です..笑)。ところが、学生時代の最後のグループワークのチャンスをミスをしたくなかったし、一年間大変お世話になった秋元国際奨学財団の少しでも力になればと思って「YES」にしました。実際に編集作業をやった時は、皆のびっくりするほど協調性に惹かれ、編集作業を終えたあとの食事で大変親しくお話ができ、この活動に参加して大変良かったと思っております。

委員 京都大学 裴 蘭珠

京都にいるという理由で財団の行事に積極的に参加できなかったこともあり、今回編集委員の依頼があった時には大変うれしかったです。しかし、距離の問題で3回の会議のうち(Skypeでは参加したものの)東京の会議には1回も参加できなくて、編集が終わった今は残念な気持ちでいっぱいです。それでも、竜の子会報誌第9号が、関係者の方々、編集に携わった編集委員達のおかげで無事に完成できて大変満足しています。最後まで楽しく読んでいただき、皆さんにもこの気持ちが伝わりましたら幸いです。

委員 東京海洋大学 呂 思文

竜の子奨学生になってからまだ一年も経ってないのですが、「竜の子奨学生」会報第9号の編集委員を担当させていただきまして感謝しております。

編集者としての経験がないので、最初少し不安な気持ちがありましたが、会議でみんなと一緒に文章を直したり、意見を話し合ったりしながら会報を順調に作成し、完成につれ喜びを感じました。編集委員として、文章を書くことだけではなく、インタビュー記事の取材や誌面の設計にも力を入れなければならぬ、大変勉強になり、自分自身にとっても非常に貴重な経験でした。ご協力して頂いた皆さん、本当にありがとうございました。



第1回編集会議の様子



第3回編集会議を終えて

「その夢はきっと世界を変えていく」

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている
その夢はきっと世界を変えていく 平和のため
いろんな事があるけれども どんなときでも

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に
夢 希望をかなえる為 みんなは生きている
その夢はきっと世界を変えていく かならず